
殺人鬼の住む家で

鈴芳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺人鬼の住む家で

【Nコード】

N8225Z

【作者名】

鈴芳

【あらすじ】

吉田と伊上の、変わった日常のお話。

鈴芳の携帯サイトと同時掲載中

いち

壱

もう夜が更ける。月もいつの間にか沈んでしまい、反対側からは次期に太陽が上るであろう時刻に、坂上という一人の男はせっかくのスーツをだらしく着込んだまま——来ているだけまだマシだ——ゴミの中で眠っていた。考えなくてもわかる。騒ぎ過ぎの飲み過ぎだ。恐らく記憶さえも飛ばしてしまう程、酒に溺れたのだ。

幸いな事に今日は土曜日だ。遅刻の心配もない。それにこの事態は花の金曜日だからとはしゃぎ過ぎた結果だから自業自得であり、彼は誰も責めることはできない。坂上に降りかかるのは、やってしまったと言う後悔の念と激しい二日酔いだ。せつかくの土曜日なのに。

正午。坂上は風呂から上がった。早朝の爽やかな目覚めを体験したのち、彼はすぐさまそこを離れて家路へと着いたのだが、どうにもゴミと仲良くし過ぎていたらしく酷く臭っていた。そこで迷わず風呂へと直行した。そうして気が付けば正午になっていて、坂上は一つ、大きく息を吐いた。

——ヤバい、俺いつからあそこで寝ていたんだ？

昨夜会社を出たあと、同僚数人と飲みに出て三軒目までは覚えていた。が、その後何があつたのかがちつとも思い出せやしない。飲んで飲んで飲みまくり、まるで童心に帰ったかのように騒いでいた記憶はある。が、細かい所を思いだせない。

坂上は必死に思いだそうと数分もがいたが、どうにも飲み方が悪かったのか体調が宜しくない。せりあがってくる吐き気に思いだすのをやめてしまった。

——っ気持ち悪い！

坂上は風呂上がりのパンツ一丁のままトイレに駆け込んだ。

ピンポン。

ふいにチャイムが鳴った。まだ胸——というか胃のあたり——がムカムカとしていて気持ち悪い中、坂上は鳴ったチャイムに不信感を抱いた。いや、この不信感というのは丁度いい言葉じゃない。このどうしようもないムカツキに対する八つ当たりにも等しい感情だ。

坂上はとりあえず手近にあったジーンズに足を通して玄関を開けた。

「——うつわ、良い身体」

「……、何か用ですか伊上サン」

「どうも昨日は坂上さん帰ってきてないようだったから、胃に優しいものでもーと思ってスープ作ってみたんだけど」

この伊上という女性は、坂上の住むアパートの隣人だ。つい先日、一人の男と越してきた人で、人当たりもいいお嬢さんだ。まだ二十歳になったばかりらしい。

「それはどうも有難うございます」

「いえいえ。ていうか、女ですか」

「は？」

「いやいやそんな御謙遜をー」

「いや、何を言っているか……」

「やっぱり坂上サンカッコいいですもんねー。スーツびしつと着こなしてるのとか見ると、同い年の男連中なんかただの坊主ですからね。やっぱり大人って感じがして素敵です。あ、ていうか顔色良くないですね……やっぱり二日酔いとかですか？ 二日酔いつて言っても、実はまだ私そこまでお酒飲んだ事なくってよくわからないんですけど……あれ？ コーンスープって胃に優しいんですかね？ 作っというてなんだよって感じですけどねー。ていうか坂上サンてば凄いいい体してますね！ やっぱ筋トレとかって日常的にしてるんですか？ あ、それとも恵まれた体ってやつですか？ くそーやっぱり常人は地道に筋トレするしか――」

「あのー！」

「あ、はい」

「気持ち悪いんでもういいですか？」

一応の笑顔で坂上は言い切って、呆氣にとられていた彼女の眼の前でボタンと戸を閉めた。すぐにガチャリと鍵を閉める音もして、
「あーあ」伊上はそう笑った。

「――怒られたんだ」

隣の部屋の扉の奥から、誰かが外を覗き込むようにして言った。

「みたいだね」

伊上はそれに笑って応えた。するとそいつも応えるように笑い返して言う。「俺、奈々があんな喋ってるの初めて見た」と。

「私も自分があんなに一人で喋れるとは思わなかった。ていうか吉田、あんたそれ私の服なんですけど」

「え——あ、……ごめん」

「あーあ、もういいよ」

伊上は自分の部屋へと入って行った。

中はコーンスープの臭いで充満していて、小さなリビングに置いてある四角くて黒い机の上には白いお皿があり、中身はついさっき坂上にお裾分けしたコーンスープ。中央には一枚の大きなお皿があり、そこにはロールパンが数個と、ジャムの瓶。

「……洋風な朝食だな、吉田」

「和食がよかった？」

「いや、腹に入ればなんでもいい派」

そうして二人は白いベッドを背もたれにして隣り合って座った。

正面には大きな液晶画面があり、ニュースキャスターが世で起きた事件の事を色々と喋っている。もっぱらの話題はもちろん連続殺人犯について。

そいつは全く関係の無い人間を一定の周期で殺して回っている危ない奴で、そして今の今まで——もう既に十人近くの人を殺している——一度も痕跡を残していない。いわゆる、「完全犯罪」をしているらしい。証拠となる指紋もなければ、加害者と争っている形跡も何もない。そして何より、誰にも顔を見られていないという事。犯人が男なのか女なのかさえもわかっていないのだから、一部の人間の間では「神隠し」だの「地球外生命体」がどうのとか「人ならざる者」がどうのと騒ぎ立てている。

だが今の世にそんなモノの存在を信じているのはごく少数であり、

今を生きる人は皆、目に見えないものに怯えこそするが存在を完璧には信じてはいない。殊更日本はそうである。諸外国にはある信仰が、日本にないのがそれを白日の元に晒している。

「ねえ吉田」

「なあに」

「吉田って神田にいたよね」

「うん」

「長かったの？」

「一ヶ月、くらいだったかな」

「ふーん」

今、目の前でやっているニュースの現場も、神田だ。

「あの写真の人、確か――」

「うん。奈々の前の俺の飼い主」

「そうだったね」

テレビで報道されている、物々しい映像はつい一週間前のバラバラ殺人の現場だ。地面に飛び散る血痕に、それを隠す様に歌舞されているブルーシートとたくさんの警察官。あまりにも残酷なその現場に、吐き気を覚える報道記者もいたようで、ある番組でこの事件を追いかけていた一人の女性記者が数日間寝込んだという噂が立っていた程。

いつか自分も殺されるのかな。

伊上は隣に座りテレビを見る吉田を見つめながらそんな事を考えた。

——あ、そしたら私もバラバラとか？

「ねえ奈々」

「ん？」

「今日牛乳使っちゃった」

「そうだね」

「もうないよ？」

「買い物行かなきゃだな」

「行きたいな」

「マジ？」

「うん」

「じゃあ今日行くか」

「うん」

そう柔らかく笑いかければ、吉田は応えるように笑い返す。

——本当にこいつがこの残忍な殺人犯なのか？

伊上奈々の脳内では、数々の葛藤が重なり合っていた。

いち

昼間の大学は、授業を終えた学生や教授たち、それから付属幼稚園の保護者や園児たちが食堂に集まっていたりと騒がしい。部外者の立ち入りを固く禁止してはいないから、時折見かける謎の人物や、学食目当ての主夫や隠居している御老体。一挙に様々な人物が学内へと侵入してくる。

吉田もそんな中の一人だった。

「吉田、何食べたい？ ワンコインでこの量だからお安いよ」

「……別に」

「あつそ。なら私の食べたいものね。定番のサバの味噌煮と、この旬の食材盛り合わせ。文句はないよね？」

「うん」

そう言ってまずは場所をとりに吉田を連れて彷徨い歩き、ちょうど中央の一番騒がしい場所が空いていたらかそこに吉田を座らせた。

「じゃあ待ってて。買って来るから」

間違っても動くなよ。

そう念を押した伊上は、足早に去っていく。吉田はそんな井上をずっと目で追って——いや、知らないものを見るのは好きじゃないだけ——戻ってくるのをひたすら待った。するとどこからともなく甲高く下品な笑い声が聞こえてきた。どうにも耳につくその笑い声に、吉田は眉をひそめて視線を向ければ——

「え、何あの人」

視線が合った。無駄なまでの露出を惜しみなく晒すその女子大生に、吉田は伊上と彼女を比べた。そしてすぐに、比べるまでもないかと彼女から視線を逸らし、ただただ伊上の帰りを待ちわびた。

「カッコよくね！」

「ねー！」

「どこの人だろう……大学じゃ見た事ないかいし」

「他んところから来たんじゃない？」

「え、だったら彼女持ちなんじゃないの？」

「嘘。あ、でもそうかもねー」

口々に言いたい事を言う彼女らに、吉田は久しく感じていなかった酷い不快感を感じた。逸らしていた視線も再び戻して彼女らを見れば、そのうちの一人が吉田の視線に気が付いた。気が付いたから、吉田がこっちに気があるものと勘違いした女が、吉田に近寄り声をかけた。

「あのおー」

「……」

スッと逸らされた視線に、カッとなった女。

「平島！」

そこに丁度、吉田の待ちわびていた伊上が現れた。どうやら伊上の知り合いらしいその平島という女——急に取り繕ったような笑顔を張りつかせて、伊上に話しかけた。

「うっわ！ 何かと思えば伊上サン？ 何、どうしたの？」

「どけ、そこは私の場所だ」

「え、嘘。もしかして伊上サンの彼氏だった？」

彼。

そう言つて指を刺したのは全身を黒で統一していた吉田で——伊上はそんな吉田を見向きもしなかった。見ていたのは、ずっと平島だった。

「違う。ていうかとつと退いてくれないかな。平島の香水嫌いなんだよ」

面と向かった姿勢のままそう言つてのけた伊上に、平島は眉を吊り上げて怒りをあらわにした。下手に出てりや付けあがりやがつて！ 定番なセリフが思い浮かぶようなそんな状況に、吉田は気にせず伊上の手からお盆を受け取りそれをテーブルに置いた。

「友だちのいない伊上サンに優しく声かけてやってんのにそんな態度とるわけ？」

「別に頼んでいないが？」

「佐鹿先生に頼まれたのよ。あの事も仲良くしてあげてねって」

「いい迷惑だな。佐鹿にも伝えときな、私は大学に仲良しこよししに来てるわけじゃないってな」

「はあ！？」

「何か文句でも？ 別にいちいち話かけなくてもいいんだよ？

あ、厄介な仕事が一個減ったね！ 良かったじゃん」

伊上の言う言葉には全部、感情がこもっていた。感情の無い棒読みなんかよりもずっと腹の立つ言い方は、激情しやすい平島にとつて最高の餌だった。抑えの利がなくなつた平島——ココが食堂で、今は一番人が多い時間だと言つことも何もかもを忘れて声を張り上

げた。それはキンキンとした小さな子どもが出す叫びの様な声で、思わず耳を塞ぎたくなるようなものだった。おまけに何を言っているのかもわからない。伊上は眉間に皺を寄せた。

「五月蠅いよ、平島」

「冗談じゃないし！　ねえ何様？　あんた何様なわけ！？」

「私は私だ。平島と同じ、ただの女子大生だ」

「どうだか。聞いたよ？　あんた親が社長だか何だかで金持ちなんだろう？　何さ。やっぱり世の中お金で、お金持つてるあんたは調子こい——」

「私がいつ調子こいたよ」

「いつもだろ！」

「呆れた」

「は？」

「いや何でも」

「っ、そーゆーのが調子こいてるってんだよ！　この——」

丁度そこへ、平島の言葉を遮って一人の男が現れた。

「これ以上は、ちょっと見てられないな」

「さ、佐々木センパイ……」

現れたのは、吉田並みの身長を持った四年生だった。

「駄目だよ？　オンナノコが言い争いなんて。君も、僕に免じて——ね？」

人のよさそうな笑顔を伊上に向けて、佐々木という男は平島を連れてその場を去って行ってしまった。残された伊上と吉田はようやく落ち着けるなと思い席についたが、今の今まであった言い争いの

せいか注目の的となっていた。

ざわざわと、誰もが囁くんだ。

だけどそんなざわめきなど、当の二人の耳には入っていなかった。

「それじゃあ吉田、食べようか」

「うん」

お腹を空かせていた二人は、さっきまでの出来事など知らないとも言つかのように、目の前にある定食に箸をつけた。

「——それで平島、何があつたの？」

食堂から程なく歩いていった平島と佐々木、その他数名は先程までの喧騒とは別世界の様な、誰もいない静かな教室にきていた。いつもなら何人かがお弁当を広げていても可笑しくはない教室なのに、誰もいない。少しだけ異様な空気が流れているのは何故だろう。

「ここね、お昼に使うって俺が人払いしてたんだ」

「それで、誰もいないんだ」

「そう」

俺昼寝しようと思ってさ。

そう笑って言った佐々木は、机に座り立ち竝んでいる平島たちを見た。同じ様な出で立ちをして、同じ様に髪を伸ばしてカールさせる。そんな姿に興味などない佐々木は、だけど笑みを絶やさずに言う。

「さっきの子とは友だちか何か？」と。

「違う。ただ、ゼミが一緒ってだけで……」

「それで何であんな言い合いに？」

「だって！ あの子ってば私の香水が嫌いだとか言ってるかも——」

「ああ、要するにお前一人で勝手に怒ってたわけだ」

急に冷めた佐々木の言い方に、平島以外の子らはみなびくりと肩を震わせた。

「勝手って何よ！」

「ソレ。キレイやすいの、平島の悪いところだよ」

「……だって、ム力つくんだもん」

涙を堪えるように俯いてしまった平島に、佐々木はそつと頭を撫でた。「大人になろうな」そう、小さく呟いた。

その言葉に、平島は傷ついた。

に

「やあ」

教室に入るなり、佐々木は一人隅っこに座っていた伊上に声をかけた。だが当の本人は全く聞こえていない、もしくはシカトしているのか返事をしない。佐々木を見もしない。

「——君に話しかけてるんだけどな——」

しかし諦めない佐々木は、今度は腰をおろして直接伊上の顔を覗き込むようにして話した。そこでようやく伊上は読んでいた本から視線を佐々木へと向けて、「たらしと話す口は持っていない」と言った。

「たらしって……え、僕そんな風に言われてんの？」

「……」

「え、ちょっと聞いている？」

「……」

——何なんだよこの女。

本当に口を利かなくなつた伊上に少しだけ嫌悪しながら、それでも佐々木はその場を離れようとはしなかった。間もなく授業も始まるというのに、いつまで居るつもりなのか。周囲からは佐々木に話しかけられているというだけで注目されるというのに——けれどもやはり伊上はそんな事気にもかけてはいなかった。

全てがどうでもいいのだ。

伊上を動かすモノは、吉田だけ。

「ねえ奈々ちゃん」

「……」

「わかった、黙って聞いててくれるだけでいいや。あのね」

ざわめく教室に、教授が入ってきた。だけど佐々木の口は止まる事をしなかった。

「さつき食堂で会ったの覚えてる？ 平島と言い合いしてたでしょう？ あの時は平島がいきなり怒鳴っちゃってごめんね。あの子、ちよつとキレやすいんだ。すぐに思った事口にしちゃうし、ちよつと下品だけど根は良い——」

一体何が言いたいのか。

伊上はウザくも目の前で喋り続ける佐々木にうんざりしていた。お前のお陰で授業も始まらない。何故教授は佐々木を注意しないのか。伊上は読んでいた本を勢いよく閉じた。パンつと音が響き、それを合図に教室中が静かになった。

「先生、授業始めないんなら私帰ります」

「あ、え……と、」

そうしてチラリと佐々木を見た教授は、少し躊躇いながらも授業を始めると言った。そうして佐々木も大人しく教室を出て行く事になり、伊上も授業を聞く態勢になった。

——伊上、奈々か。

教室を追い出される形で出た佐々木は、一人笑った。まだチャイ

ムが鳴って数分しか経っていないからかまだ騒がしい廊下。佐々木は行き交う学生たちを見下しながら、研究室へと歩を進めて行った。しかしその途中、ふいに伊上と共にいた黒づくめの男の姿が佐々木の目に飛び込んできた。

——あ。

ラッキー。思わず心で拳を作った佐々木は、研究室へと向かわずに吉田の元へと小走りで向かっていった。擦れ違いざまにぶつかりそうになるも、ごめんねと言っただけですぐに立ち去って行く。今の佐々木にはもう、吉田しか見えていなかった。

「ねえ！」

「……？ お、れ？」

「そう。君、さっき伊上奈々ちゃんと一緒にいた人だね？」

「奈々？」

「付き合ってるの？」

「誰が？」

「だから、君と、奈々ちゃんが」

「？ 付き合う？ 奈々は、俺の飼い主だけど？」

——飼い主？

佐々木の頭には疑問符が浮かんだ。

「え、それはどういった——」

「お前誰？ 奈々の何？」

「あ、俺は佐々木、浩介」

「ふーん」

まるでじゃない。本当に興味など端からなかったのがわかるその言い方に、佐々木の内心は穏やかではなかった。今の今まで、自分に興味を持たない人間なんていなかったから。誰もが佐々木の美貌を羨み憧れ、そしてお近づきになりたいと思っていた人間ばかりに囲まれていた。

これは自慢なんかじゃない、これが佐々木のリアルだった。

誰もが羨むその顔の作りはオンナノコを虜にし、同性からも羨望の眼差しを一身に受けてきた。だから佐々木自身も己を磨き、常に己を高めてきた。自分はこうでなくてはいけないんだという、理想像を追い求めてきていた。

だからこそその自信があり、だからこそ誰もが佐々木を羨望するんだ。

「ふーん、て」

「……」

「俺に興味ないの？」

「なんで？」

「なんで、って——」

「俺は、奈々にしか興味ないから」

「なに、奈々ちゃんにそこまで惚れてんの？ そんないい女か？」

あれ。

そうっつんけんして言う佐々木だけど、吉田はそれにピクリとも反応は示さなかった。それもそのはず、吉田は伊上に惚れている訳ではないのだから。惚れている男ならば、女を馬鹿にされて憤りを感じずにはいられないはずだけど、そうではない。そうではない女をいくら馬鹿にされようが、どうでもいい。

そもそも吉田にはそんな感情を持ち合わせてなどいない。

吉田がいつも感じているのは、自分が生きていると言つ実感欲しいという欲望だけ。それを感じられるのが、伊上と居る時だけということ。だから吉田は、伊上に惚れているのではない。伊上に依存しているのだ。彼女なしでは、今の吉田は生きていけないくらいに、依存している。

まだ出会ってからひと月も経っていないというのに――

「なに、してんの？」

吉田と伊上の出会いは、血塗れだった。伊上が、血だらけの吉田を偶然見つけてしまった事が始まりだった。

普段から意志など無く生きていた伊上は、人が近寄らない場所によく出かけていた。元より執着する気持ちのかけていた伊上にとつて、吉田は最高のプレゼントに等しかった。日常ではありえない非日常と出会ったのだから――興奮を覚えるのも無理はない。これから始まるかもしれない非日常を思えばこそ。

「――もしかしたら」

「？」

「私には、君が必要かもしれない」

「なに、どういうこと？」

傍らに転がっていたのは、紛れもない誰かの体だった。伊上の眼にもしつかりとそれは捉えられていたし、吉田もそんな伊上に気付いていた。だけど、吉田は伊上の言葉が気になっていた。

「それ、君が殺ったの？」

「……」

「凄い、人ってそんな簡単に死んじゃうんだ」

「……」

「殺して、何を感じた？」

「俺は、生きてる、って、思った」

「人を殺して自分が生きてるのを感じた？」

「そう」

「君は、生を感じたいの？」

「俺は、いない子、だから、死んでたんだ」

「……、でも君は、生きてるよね」

「死んでたんだよ」

「死ぬ、の、価値観の違いかな」

「俺は、理由なくなんて、生きてない、死んでるのと同じだと思うから」

「そうか、うん。そうだね……私も、どうして生きているのかわからないんだ」

「同じ？」

「少し違うけど、」

もしかしたら。

それは真昼の事だった。

「——お前は、何だか見ていると窮屈に感じる」

「え」

「消える。俺の前に出てくるな」

凶星をさされた。

佐々木の中には、消えろと言われた事よりも、「窮屈に感じる」と言われた事にショックを受けた。何故こんな初対面の人間にそんな事を言われなければいけないんだと。強く、激しい感情を覚えた。

「俺が、窮屈？」

「……？」

「俺はただ——っ、」

——ただ、何だ？ 周りの期待に応えてた？ 俺はただ周りの目を気にして、周囲の評価ばかりに気をとられて、……それだけだ。俺はただ、

神より与えられたその容貌に、誰もが憧れていた。そしてそれは佐々木自身も例外ではなく、彼もまた、己の容姿に惚れていた。ナルシストと呼ばれても不思議ではないほどに、彼は自分自身の見た目が好きだった。が、嫌いでもあった。

佐々木が嫌いなのは、自分のこの醜い感情だった。平島に「キレイすいのは悪いところだ」「大人になれ」なんて——それは自身身にいつも言い聞かせていることだった。もう今年で二二になる佐々木も、いい加減大人にならなければいけなかった。いつまでも、子どもではられない。

「お前に何がわかんだよ」

「？ 俺はお前のことなんか何一つわかんないし」

「むかつく」

「自分が？」

「お前のその、俺を見透かしたような言い方が」

「——へえ」

口元を上吊り上げて、吉田は笑った。

見透かされてんだ。

「——っ」

佐々木の歪んだ顔は、吉田しか知らない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8225z/>

殺人鬼の住む家で

2011年12月26日02時54分発行